

Q：カードを書かせることが多いと思いますが、注意することはありますか？

A：子どもの言っている意味を正しく理解することです。それは、カードや作品至上主義にならないということです。絵や文が上手で丁寧であることを読み取るのではなく、子どもの内面を読み取るために、カードを利用するのです。

カードに表現された事柄は、子ども一人一人の気付きです。子どもは直接体験した場合、何がしかに気付きます。気付かせるためには、「魅力ある活動」「表現を伴うふりかえり」「気付きを残すための教師のかかわり」の3つが大切であると考えます。

活動に魅力がないと、子どもは興味を示さず、自分らしい言葉を生みません。また、活動に魅力があっても、表現活動をさせなければ、何を考えていたかなど子どもの内側を探ることもできませんね。

子どもはよく「先生、みてみて」と言います。その際に子どもは、何かに例えて表現することがあります。例えば、オナモミのことを「ひつつき虫」などと言う言い方がその例です。そこには子ども独特の、そして一人一人の感じた個性的な世界があります。何かに例えることが上手な子、つまり見立て上手な子にすることも、気付きを表現させることでは大切だと考えます。

子どもが書いたものには、言葉足らずの表現がたくさんあります。ですから分からない時には、子どもと対話などして、子どもの世界を掘り起こすことが必要です。私はよく給食の時間など、子どもと対話します。すると、言葉でカードに書ききれなかった子どもの内面が見えてきます。

このようなことは、幼稚園、保育園ではよく行われているのではないのでしょうか。子どもが描いた絵などは、何を表現したかったのか分かりにくいことがありますからね。教師と子どもが対話をし、子どもの書いたカードの意味を理解した上で、評価や支援をしていくことが大切になってきます。

ですから、生活科は特に、カードに書いたら終わりということではなく、書かせることで、子どもと話す機会を増やし、児童理解に努めることが必要なのではないでしょうか。

前述の「活動」「表現」「かかわり」を3点セットと考え、バランスよい学習展開を考えることと、子どもの気付きを見失わないという教師の姿勢が大切です。